



森の高齢化

私たちの暮らしが森から距離を置くようになってから、かなりの時間が過ぎました。特に落葉広葉樹林（コナラ林）との関わりが薄くなっています。

昔は生活のための燃料は木材資源が中心でしたが、近代化する中でエネルギーの中心は、ガス・電気・石油に変わり、薪炭の利用はほぼ無くなりました。薪炭の利用があった雑木林は、定期的に伐採され、残った根株から萌芽更新して、株立ちとなり再生していました。雑木林でよく見掛ける株立ちのコナラは、伐採・再生を繰り返してきた証です。しかし、50年以上伐採していないため、薪炭に利用するには大きくなり過ぎたコナラが目につきます。

外から森を眺めると、大木となったコナラが樹冠を広げ、一見、立派で素晴らしい自然がそこにあるように見えます。しかし、素晴らしい自然には、持続性がとても大切だと考えます。樹木も生きものなので、その生命には寿命があります。一般に広葉樹の平均寿命は80～100年といわれ、最後は枯れたり、倒れたりしてその一生を終えます。大木の寿命が尽きる一方で、林床では、種から発芽した若木（苗木）が日陰に耐えて育っています。枯れ木や倒木で樹冠が空き、そこから差し込む光を受けて若木は成長速度を加速させ、空いた樹冠に向かって大きく育ちます。

このような森は、天然更新して代謝を繰り返し、若返りなが



ら存在し続ける素晴らしい森といえますが、最近目にする多くのコナラ林で、林床に若木が育っている森を見ることはとてもまれです。それは、今ある森（コナラ）が枯れた場合、その穴を埋める次世代が育っていない森ということになります。これが「森の高齢化」です。大きな理由は、人と森の関係が希薄になり、萌芽更新の新たな芽が育たなくなっていることです。

昔は、薪炭の切り出し以外にも落ち葉を集めて田畑の肥料にしていたため、林床は土がむき出しでした。そのため、コナラなどのドングリは、種として熟すと落下してすぐに根を出すことができました。近年は、落ち葉かきも無く、落ち葉が厚くたまっています。そこへ落ちたドングリが根を伸ばしても重なり合った落ち葉が邪魔して、なかなか地面に届かずに枯れてしまっているようです。

いまさら昔の暮らしに戻ることは非現実的ですが、これからも、森が森として続くために、新たな「人と森の関わり」が必要な時期にきています。

(杉野)